

武蔵野年頭日曜聖書講筵

神の幕屋（1）

—— 詩篇第91篇 ——

1979年1月7日

小池辰雄

伝道と著作 隠者と陽者 キリストの中に隠居 わが避け所わが城 なんじ畏るることなし
隠れたる福音 神の幕屋 聖霊の幕屋 無力の無能力 弱者となると強者に 愛をもってしが
みつく キリストの活ける幕屋

【詩篇91】

1 至上者いとたかきもののもとなる隠れたるところにすまうその人は

全能者の蔭かげにやどらん

2 われエホバのことを宣のたまべて

エホバはわが避所さけどころわが城

わがよりのたのむ神なりといわん

3 そは神なんじを狩人かりうどのわなと毒をながす疫癘えやみより

たすけいだしたもうべければなり

4 かれその翻はねをもてなんじを庇おほいたまわん

なんじその翼の下にかくれん

その眞実まことは盾たてなり干なり

5 夜はおどろくべきことあり

昼はとびきたる矢あり

6 幽暗くらきにはあゆむ疫癘えやみあり

日午ひるにはそこなう励はげしき疾やまいあり

されどなんじ畏おそるることあらじ

7 千人はなんじの左にたおれ

万人はなんじの右にたおる

されどその災害わざわいはなんじに近づくことなからん

8 なんじの眼はただこの事をみるのみ

なんじ悪者あしきもののむくいを見ん

9 なんじ曩なほにいえりエホバはわが避所さけどころなりと



なんじ至上者いとたかきものをその住居すまいとなしたれば
 10 災害わざわいなんじにいたらず

苦難なやみなんじの幕屋に近づかじ

11 そは至上者いとたかきものなんじのためにその使者つかいたち輩におおせて

汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり

12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんために

汝をささえん

13 なんじは獅ししと蝮まむしとをふみ

壯獅わかきししと蛇とを足の下にふみにじらん

14 彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けん

かれわが名をしるがゆえに我これを高処たかきところにおかん

15 かれ我をよばば我こたえん

我その苦難のときに偕ともにおりて

之をたすけ之をあがめん

16 われ長寿ながきいのちをもてかれを足たちわしめ

且わが救いをしめさん

●伝道と著作

明けましておめでとうございます。この年は私には、また皆さんにとつてもと思いますが、本当に新しい年になりそうです。いやもう実になりつつある。非常に希望に満ちています。

このあいだ、大晦日の前の日だな——いつかの大晦日の日もそうだったけれども——三十日に高島屋の前を通っていたら、高島屋易団えきがやっているんだよね。それで例によつて、私はチャメ公だから、前列に立つて少し見ていた。

「今日は暮れだから、前の人は見ましよう」

というわけだ。なかなか達人らしいね、あの易者は。自分は高島屋易団公認の一番弟子だと言っていました。チラチラと人の顔を見て、大体見当がつくんだな。

「この中に婚約している人が三人いる」

と。というのは、カップルで来ているんだよね。

「ちよつと四十代で命の危険な人が二人いる」

なんてなことを始めにちよこちよこ言つて、みんなの気持ちをつかまえるのがうまい。なんのかんのやつてまして、それからガラガラとやるでしょ、あのへんな棒を。あの棒を何十本かあるのを、目をつぶって一人びとりに渡す。その棒には小さな番号がみんな書いてある。

「もし、当たっていなかったら、当たっていないということだけを言つてください。」



番号を言つては困る」

なんてやりましてね、私は48番だったけれども。「あなたは48」とか言つてね、みんな当たつてしまふんだよ。一人当たらなかった。もう一遍やり直したら、当たってしまったけれども。まあ、ああいう霊覚といえますか——熟練と霊覚と両方なんですけれども——ちょっと分からんですね。

「あなたはとてもスケールの大きな人だ。ちょっと他のとはちがう」

と、今度は幕の中に入って一人びとりに言うんです（笑）。それで、私の手を見まして、

「非常に神秘的な要素がある。心理学か宗教学か何かそっちの方に関係しているでしょう」

と。その通り。それから、

「寿命はもう90は大丈夫ゆく。来年は必ずあなたの人生に大きな変換がくる」

と言う。これはもうこつちは分かっているんだけれども。そういうことを言うんです。やはり、易の世界はなかなか、易というものもばかにならない。けれども、みんなに言つてました。

「決して宿命的に考えてはいけない。そういう一種の法則はあるけれども、しかし、それにどう対処するかということがまた大事なことで、良いといつていい気になつたり、悪いといつて悲観したり、それはどつちもいかん」

と。そういうようなことで、ごもつともでございと思いますと聞いてました。私はチャメだから。この前も、新宿の高島屋易団でもつと詳しくいろんなことを言つてましたけれどもね。

私はもう既に去年、二度ほど神さまから、ある示しが来て、はつきり今年は学校を退く。別なコースに行くということを決めていました。そのことは既に天野先生には始めに言つてある。理事長もちゃんと理事会で私のことを宣言しました。とにかく、非常にその点は決定的になる。

そういうことで、4月からは、私は伝道と著作に生活の主力を注いでやります。実は去年、マルチン・ルターの第四巻を出すつもりで、かなり原稿はできているけれども、途中で、1983年がルターの生誕五百年に当たることになり、そのルターの生誕五百年祭の早春に真先に第八巻として出します〔註：第七巻『聖書の人ルター』1984年2月刊、第八巻『詩歌集』1986年4月刊〕。

その年には二つ出すつもりです。晩秋には『随想集』を出す〔註：第六巻『随想集』1982年12月刊〕。それで予定通り、1984年までに全十巻を出します〔註：第十巻『聖書は大ドラマである』1988年11月刊〕。

それは皆さんのいろんなご協力にもよらなければなりませんけれども。なかなか印刷も簡単でないものですから。とにかく、出していきたく思っております。



学校と著作・伝道とはこの時点に比べると、もう両立しない。私はギリギリのところに来ましたから。今までは何とか両立させてましたけれども。

今年は、秋に『詩篇珠玉集』（註：第四巻『詩篇珠玉集』1980年1月刊）というのを出します。こないだから、私は詩篇を選んでるんですけども、なかなかやはいいいものですから、カットするのが難しいくらいで、少なくとも50篇は書かざるを得ないと思っています。それで400頁の中に収まるかどうか。

●隠者と陽者

今日は詩篇91篇です。これは詩篇46篇と兄弟篇と言ってもいいような詩篇で、非常に力強いですね。マルチン・ルターが詩篇46篇を宗教改革の進軍の歌としましたが、91篇はまたある意味において、それよりかある深い面を持った詩篇です。学者によっていろいろ節の切り方、読み方がありますがけれども、それやこれやのことはみんな省きまして、私自身でいきます。

¹至上者^{いとたかきもの}のもとなる隠れたるところにすまうその人は

全能者の蔭^{かげ}にやどらん

「至上者の隠れ場に坐す者こそ全能者の蔭に宿っている」

と。私の訳です。決定的な訳はまたいずれ文章のときにやりますけれども。「至上者」はヘブライ語で「エリヨーン」という字です。エリヨーンの隠れ場。この「隠れる」という言葉は旧約にはよく出てくる。また、特に非常に著しいのは、イザヤ書45章15節です。

「¹⁴……なんじのまえに伏しなんじに祈りていわん、まことに神はなんじの中にいます、このほかに神なし一人もなしと。¹⁵救いをほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。」（イザヤ45・14～15）

顕れていない。隠れているんです。ラテン語で、

「デウス アブスコンディートウス」「隠れています神」

という。神自身が隠れていたもう。キリストが、

「隠れています神に祈れ」

と言われたでしょ。マタイ伝6章の山上の大告白のところですよ。

「⁶なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん」（マタイ6・6）

と。大事な言葉です。神さまは、我々には正直、肉眼にも肉の耳にも隠れている。だから、これは神秘の世界です。宗教は正に神秘なんです。神自身が正に神秘なんだ。神自身が「隠者」なんだ。神が隠者だなんて、私は今日初めて言うね。神さまは本当の隠者なんだ。隠者が陽者になった。「陽者」なんていう言葉はないだろうな——陰陽の学という——これはキリストです。隠れたる神を顕している。



「我を見し者は、隠れたる神を見しなり」

と。だから、「陰陽道」だな。福音は正に陰陽道です。おもしろいね。昼間と夜とがあるが、神さまは夜だよ。神さまは夜で、キリストは昼間。神を顕現したんだから。中世の神秘家が――エックハルトだとか、タウラーだとか――「永遠の闇」という言い方をする。なぜ、神さまのことを「闇」なんて言うかと思う。「底なき者」だとかね。

「隠れています神」の中に、「エルヨーン」（至上者）の中に――エルヨーン自身が隠れたる神なんだから――そこに入ることは「隠れ場に坐する」んです。だから、

「至上者の隠れ場に坐する」

というのは、

「至上者の懷の中に坐っている」

ということだ。キリストがそうじゃないですか。

「父の懷にいます独子のみこれを顕せり」

と、ヨハネ伝1章にちゃんと書いてある。本当におもしろい。ちよつと御霊で瞑想していると、すると出てくるからね。17節、

「^{おきて}17律法はモーセによりて与えられ、^{めぐみ}恩恵と^{まこと}真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。^{きた}18未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます^{ひとり}独子の神のみ之を^{あらわ}顕し給えり」（ヨハネ1・17、18）

と、はつきり書いてある。隠者を顕した陽者である。陰陽ということをして、私はこんなに今日、今この瞬間ほど、ああこれは福音であつたと思つたことはない。今、私はあなたがたにしゃべりながら、これは示されていくんだよ。どういふんだらうね、私は。

この第1節は、本当はこの91篇の一番大事な節なんです。神さまの中に――我々は具体的にキリストの中にですよ――キリストの中に隠れていなければ。

「キリストの隠者となれ」

と言うわけだ。神自身が隠者である。キリストの中に隠れる。そうすると、キリストは神の顕現者だから、陽者だから、我々もまたキリストに隠れることによって、キリストを顕す者の証者となる。

「陽者、証者」

となる。でなかったら、クリスチャンじゃないよ。

●キリストの中に隠居

それから、「シャッダイ」「全能者」の陰、ヘブライの詩の言葉はみんな対句になっている。「エルヨーン」（至上者）といえは今度は、「シャッダイ」（全能者）という。「全能者の陰」、「隠れ場」も「陰」も同じこと。「陰」だとか、「隠れる」という言葉が旧約によく出てくる。これはみんな神さまの中に隠れる。



「エホバはわが避け所なり」

という言葉もあるね。「避ける」もみんな同じです。「隠れる」というのは何か卑怯なようであるが、そうではない。隠れなければ、中に入らなければ、本当の力は来ないんだから。ただ仰いでたつてダメなんだ。ただ信じていたつてダメなんだ。いわゆる「信仰」だとか、どっちもダメだ。信も仰もダメだ。信じてたり、仰いでたり、どっちもダメだよ、信仰なんて。

ご隠居さんにならなければダメだ(笑)。隠れて居らなくてはダメなんだ、隠居しなければ。私も隠居したいね。それは冗談です。言葉というのはおかしなものでね、「隠居」なんて言うところ、これはダメですよ、いわゆる隠居は。いわゆる隠居はダメですけども、神さまの中に本当に隠居しなければ、もの凄い力は来ない。

「キリストの中に」

とさんざん申し上げている通りです。だから、あれだけの凄いパウロは何と言ったか、

「われキリストの中に^{うち}」

と言っているではないですか、

「エン・クリスト」

と。これが「隠れる」ですよ。祈りとは「エン・クリスト」という現実に入ることが祈りなんです。祈入するんです。祈り入る。

「南無キリスト」

なんです。だからこの、

「エルヨーン(至上者)の隠れ場に坐し、シャッダイ(全能者)の蔭に宿る」

ということとは、「南無キリスト」という祈りにおいて現実となる。キリストに祈入することによって、その現実となる。全身を投げかける祈り。それで御霊に充滿しないで、何が信仰かと言いたいんです、正直。今のクリスチャンがみんな何だかゴタゴタやっているのは、要するに、その現実に入らないからです。これはやはり、キリストが言われたでしょ。

「隠れています父に、戸を閉じて祈れ」

と。静かに深く入れる。電車の中でも、目をつむれば入ります。これを本当にやっていますか、皆さん。ただお願いが祈りではないですよ。お願いは祈りの枝葉。祈りの幹は自分自身を投げ入れること。したら、あとはどうなつたつていいことになるよ、本当に。そして神さまはいいようになさる。この一節を読んだだけで、その次元の中に入れられて、もう力が本当に溢れてしまう。

このあいだ、私の甥がやってきて——なかなかおもしろい甥なんだ——だいぶいろいろしゃべった。

「二体、叔父さんの信仰というのはどういうのか。時間空間を越えてしまうのか」と聞くから、



「何を言っているか。時間空間の相対界で、相対界において絶対界をいただくような、そういうことなんだ」

と言ってやった。何か妙に離れることではないので、実は相対界にありながら絶対界の中に入る。この部屋の間は有限だけれども、外と通じているから、窒息しない。有限にして無限なるものだ。我々のこの特殊な相対的なものの中にキリストという「アミッター」が、

「無量寿無量光者」

が入ってくる。だから、法然・親鸞の

「南無阿弥陀仏」

というのは素晴らしい言葉です。

「南無妙法蓮華経」

もそうです。まあ、仏教者もキリスト者も、もつと根源のところにもう一遍立ち返らなければどうにもならん。

私は今度の年賀状で、今年卒業する高校3年生の生徒から幾人からも不思議に年賀状がきた。それに何と書いてあるかというところ、

「校長先生の朝礼のお話は私に非常に役に立ちました。それを糧としてこれからやっています」

と。私はそういう感激的な葉書をくれた人にみんな『百世の師ヒルティ』（小池辰雄著作集第五巻1977年8月刊）を送ってやった。やっぱり、本当に聴いている生徒はいるんだよな。水を割らないで私は言ってますから。また、信仰のある人が

「喪中につき年賀状を失礼します」

なんて言ってくるから、

「それは喪中は喪中だろう。けれども、天界に往かれたその方と本当に、新しい新年をおめでとうと私は言いたいんだ」

と書いてやった。

「天地相応えて新しく出発しましょう。ふさぎ込んでいるのではないよ」

と。クリスチャンは、どんなことがあっても、ふさぎ込んではダメです。涙の奥から逆に力が出てくる。そういうわけです。だから、

「エリヨーン（至上者）の隠れ場に坐する者こそ、シャッダイ（全能者）の陰に宿っているのである」

と、私はそう訳したい。これは私たちにとって、「エリヨーン」も「シャッダイ」も具体的にはキリストであります。イエス・キリスト自身がまさにそうだった。徹底的に神の中に隠れ、またこの全能者の陰に宿っていたから、あの驚くべき言葉が発し、驚くべき業が展開していった。これはもう福音書が証しているとおります。福音書もなお伝えきれないで



皆さん、この聖書の言葉にただ囚われてはダメですよ。活きている文字である。内側から、奥からなお響きがある。その響きを聴かなかつたら。その力に、その光に触れなかつたら、何もならん。これは私が「聖書はドラマだ」と言っているとおります。そのうちに万人向きの、『聖書はドラマである』

という本でも、新書版くらいの本を書こうかと思っているんだ。いわゆる入門書なんて、あんなのはダメだから。

●わが避け所わが城

1 至上者いとたかきもののもとなる隠れたところにすまうその人は

全能者の蔭かげにやどらん

2 われエホバのことを宣のべて

エホバはわが避所あきいしよわが城わがよりたのむ神なりといわん

第1節は天使がそういうように告げているのかもしれませんが。第2節は、今度は信徒自身、

「われエホバに言わん、わが避け所、わが城、わがより頼むわが神よ」

と。直訳するとそうです。1節、2節を同じく信徒の言葉とみる見方もあります。神さまに、キリストに、

「あなたは私の避け所です、私の城です、私がより頼む神さまです」と言う。

3 そは神なんじを狩人かりうどのわなと毒をながす疫癘えやみより

たすけいだしたもうべければなり

「彼はなんじを狩人かりうどの罠わなより、滅びの疫病より助けいだしたまえば」

と。これからずっとみんな、「彼はなんじを」という言い方になっている。「なんじ」というのは、自分のことを「なんじ」という言い方もできます。けれども、こここのところを読んでいくと、どうもそうではなくて、やはり天使かあるいは牧者が言っているというような、まあ、大体、天使でいいでしょうね。「天使」という言葉が出てくるから。

「彼は信徒たるなんじを狩人かりうどのわなより、滅びの疫病より助けいだしたまえば」

これは、狩人が動物を捕る。「なんじ」は動物に例えられているわけで、この「狩人」はサタンのこと、あるいは敵のことなんだ。即ち、外的な力や内的な病氣、滅ぼすような病氣から助けいだしたまえば、

4 かれその翮はねをもてなんじを庇おほいたまわん

「その翼をもてなんじを庇おほいたまえば、彼の翼の下になんじは隠れ居るなり」

と。「翼の下」というのは時々出てくる言葉です。申命記32章に有名な言葉がある。

「10 エホバこれを荒野の地に見、これに獣の吼ほゆる曠野あらのに遇い、環めぐりかこみて之



をいたわり、眼の珠のごとくにこれを護りたまえり。11 鷺のその巢雛を喚起し、その子の上にまい翔けるごとくエホバその羽を展て彼らを載せ、その翼をもてこれを負いたまえり。12 エホバは只独にてかれを導きたまえり。別神はこれとともならざりき。」(申命記32・10・12)

「11 鷺のその巢雛を喚起し、その子の上にまい翔けるごとくエホバその羽を展て彼らを載せ、その翼をもてこれを負いたまえり」と

とある。こっちは「蔭」でなくて、翼の上に背負って天翔けてください。エホバはただ独りにてかれを導きたまえりと。著しい言葉ですね。こういう非常に詩的な表現をする。具体的な自然界の姿をみて、信仰の事態をそれで詩的に表現する。なかなか、ヘブライ人というのは文学者だよな。

「眼の珠のごとくにこれを護った」

と書いてあるでしょ。目玉のように守ったという。目玉は人間の一番大事なところだからね。翼をもて負うという。

「翼のかげ」は、例の有名なキリストの言葉があるね。マタイ伝23章です。

「37 ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣された人々を石にて撃つ者よ、雌鳥のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんじの子どもを集めんと為しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき。」(マタイ23・37)

と。福音の世界に入れてやろうと思うのに、入って来なかったというわけです。「翼の上」とか「翼の蔭」とか、要するに、いたわり愛する姿です。

●なんじ畏ることなし

なんじその翼の下にかくれんその真実は盾なり干なり

「真実」は「エメツ」という字で、この場合、

「信実」

と訳したらいいでしょうね。信仰の「信」と「実」。決して裏切らないで人を愛しぬくことが「信実」ということです。これはいわゆる真という「真実」とは違うですよ。嘘を言わないのを真実という。こっちの信実は、一人称と二人称の関係で裏切らないこと。ヘブライ語の「エメツ」という字は両方の意味を持っています。「エメツ」というのは「アーメン」という字からくる名詞です。「アーメン」という字は、「まことであれかし」と「まことなり」という、願望の気持と断定の気持と両方持つている。

日本語というのは表現が非常に限定的にいろんなことが言える。向こうのは、一つの言葉でもつていろんな意味をそこに含むから、さあどう訳そうかと困ってしまうんだよね。訳し方によると、別な面がぬけてしまう。だから、言葉の表現の仕方が豊かということはある意味において貧弱ということになる。ある訳し方をすると、その奥の意味が出てこな



かったり。だから、漢字というのは素晴らしい。漢字というのは、言葉が弾力性を持っている。日本語はへたすると、弾力性が乏しい。しかし、日本人というのは両方を本当は持っているわけなんだけれどもね。絵の世界を見たってそうだよ。大空間の中にスーッと一書きするような、墨絵というのは弾力性がある。そうかと思うと、非常に微細な書き方をしたりね。

「そのエメツは盾なり干なり」

という。その「信実」は盾である。神さまの信実は本当に守ってくださるから、敵から守る盾である。「小盾、大盾」という言い方になっている。

5 夜はおどろくべきことあり昼はとびきたる矢あり

6 幽暗にはあゆむ疫癘あり日午にはそこなう勵しき疾あり

されどなんじ畏るることあらじ

「なんじ畏るることなし」

と。「畏るることなからん」ではない。「畏るることなし」です。「ロー」という字が使っているんで、断定的な否定なんです。「畏るることあらじ」くらいならまだいいですけども、「なからん」では弱くなってしまう。

「なんじ畏るることなし、夜の恐怖あるとも、日中飛びくる矢ありとも」

「夜に何か恐ろしいことがあろうとも、日中に飛びくる敵の矢があっても、こわいこととはないぞ」

という。

「懼るるなかれ」

と新約聖書のところに——こないだのクリスマスのところにもあったね——天使が「懼るなかれ」と言う。ここではもう、

「畏れることないぞ」

ともつと断定して強い。

「暗きうちにある疫病に対して、真昼に害う災いありとも」

と。外敵だとか、あるいは病だとか、災いだとか、あらゆるそういった悪しきものに対して大丈夫だと。力ある神であるから、「エリヨーン」（至上者）であるから、「シャツダイ」（全能者）であるから。

7 千人はなんじの左にたおれ万人はなんじの右にたおる

されどその災害はなんじに近づくことなからん

「千人はなんじの傍らに倒れ、万人はなんじの右に倒れる。なんじに近づくことなし」

と。「このこと」という言葉すらないんです。

「倒れるが、なんじに近づくことがない」

ということとは、



「そういった災いが汝に近づくことがない」ということです。

8 なんじの眼はただこの事をみるのみ
なんじ悪者のむくいを見ん

「ただなんじは眼をもつてこれを見、悪しき者の果てをなんじ見るべし」
千人が——「左」とは書いてない——傍らに、万人が右に倒れても、そういうことにはならない。

「悪しき者がどういふようになるか、眼をもつてその果てをお前は見るだろう」と。
神さまの護りですね。だから、詩篇46篇と似たような角度があるわけです。あそこは自然の大変動が来ても恐れることなしと言ったね。

●隠れたる福音

9 なんじ曩にいえりエホバはわが避所なりと
なんじ至上者をその住居となしたれば

「そはなんじエホバこそわが避け所にしあれば」

と、今度は信徒が言っているんです。なんじエホバこそわが避け所でありますからと。そこで一遍切れる。それから今度また、これは天使の声になるかな。

10 災害なんじにいたらず苦難なんじの幕屋に近づかじ

「なんじは至高者をなんじの住処となしたれば、悪しきことなんじに至らず、災いなんじの幕屋に近づかじ」

と。ここに「幕屋」という言葉がある。この幕屋というのは出エジプト記25章に出ている。16節あたりから読むと、

「16 汝わが汝に与うる律法をその櫃に蔵むべし。」

幕屋にもいろいろ種類がある。この幕屋は荒野を旅して行った幕屋とは違う。荒野を旅して行ったのは天幕だ。今言っているこの幕屋は、至聖所があつて、聖所があつて、それから祭壇がある。東側が門なんだ。全体が、大きな意味では、幕屋と言うんです。

17 汝純金をもて贖罪所を造るべし。その長さは二キュピト半その幅は一キュピト半なるべし。

「一キュピト」というのは肘の長さです。

18 汝金をもて二箇のケルビムを作るべし。即ち槌にて打ちてこれを作り贖罪所の両方に置くべし。19 一つのケルブを此方に一つのケルブを彼方に作れ。即ちケルビムを贖罪所の両方に造るべし。

「ケルビム」というのは羽を持った天使ですよ。相對峙するんです。

20 ケルビムは翼を高く展べその翼をもて贖罪所を掩いその面を互に相向くべし。



し。すなわちケルビムの面は贖罪所に向かうべし。²¹汝贖罪所を櫃の上に置えまた我が汝に与うる律法を櫃の中に蔵むべし。²²其処にて我なんじに会い贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビムの間よりして我イスラエルの子孫のためにわが汝に命ぜんとする諸の事を汝に語らん。」(出エジプト 25・16〜22)

この22節が非常に大事なことです。私は、むしろ初めて気がついたと言ってもいいくらいです。即ち、贖罪所を通して律法が語られるんです。だから、もともと福音は律法の上にあるんです。キリストの福音が上で、律法は下。旧約でも律法を与えるときに、既に福音的な、隠れたる福音を通っているわけです。だから、私は律法のことを、

「隠れたる福音」

といつか言ったでしょ。ただ

「すべし、すべからず」

ではない。神さまの方からちゃんと責任をもつて力を与えるんです。その力をいただかないものだから、それでいつまでたっても「すべし、すべからず」になってしまった。

「できるぞ。そんなことはしない」

という現実が福音の現実だから。けれども、それは地上でもって、誰でもそれがなりきりはしませんよ。人間というやつはダメだから、なりきりはしないけれども、その角度の魂の在り方が非常に大事なんです。言葉や行為は破れていても、そこに本ものがあるかと。いいですね。

●神の幕屋

それから、同時に忘れてはいけないのはヘブル書9章です。そういった旧約的福音は、その幕屋の構造は今、新約的な福音に変わるんだという、ヘブル書9章は大事なところですよ。

「初めの契約には礼拝の定めと世に属する聖所ありき。」

「初めの契約」とは旧約です。

²設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と称え、その中に燈台と案と供えのパンとあり。³また第二の幕の後ろに至聖所と称うる幕屋あり。⁴その中に金の香壇と金にて遍く覆いたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、

これはみなメシヤの象徴です。本当の「マナ」はキリストですから。

「マンナー」

というのは、

「一体、あれは何だ？」

ということ、生命のパンです。



5 櫃の上に栄光のケルビムありて贖罪所を覆う。これらの物につきては、今
一々言うこと能わず、⁶此等これらのもの斯く備わりたれば、祭司たちは常に前な
る幕屋に入りて礼拝を行う。⁷されど奥なる幕屋には
即ち、至聖所には、

大祭司のみ年に一度おのれと民との過失あやまちのために献ぐる血を携えて入るなり。
贖罪の血です。傷なき当歳の羊の血。

8 之によりて聖霊は前なる幕屋のなお存するあいだ、至聖所に入る道の未だ
顕れざるを示し給う。

「前なる幕屋が必要でなくなる」と。ということとは、「本当の贖罪がなされれば」ということ
です。

9 この幕屋はその時のために設けられたる比喻たとえなり、之に循したがいて献げたる
供物そなえものと犠牲いけにえとは、礼拝をなす者の良心を全うすること能わざりき。

そうです。いつまでたつても、ただ繰り返してダメだと。

10 此等これらはただ食物・飲物のみものさまざまの濯事すすぎごとなどに係り、肉に属する定めにして、
改革の時まで負わせられたるのみ。

「改革」というのはキリストの宗教改革です。

11 然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ
此の世に属せぬ更に大いなる全き幕屋を経て、

これは人間の目に見えない幕屋です。

12 山羊と犢こやしとの血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架のことです。

永遠の贖罪あがないを終えたまえり。」(ヘブル9:1~12)

と、はつきり言っている。ヘブル人にこれをはつきり言っている。ヘブル書というのは素
晴らしい。もう旧約的な宗教はアウフヘーベンした。全部それは満たして廃止したんだと。

「神の幕屋」とは何ですか、私が今日書いた「神の幕屋」とは。それは、旧約で神さまが
示して、「こう造れ」と言ったのが神の幕屋でしょうよ。けれども、私がここに今、「神の幕屋」
と書いたのは、そればかりではもちろんない。

キリスト自身がこの「神の幕屋」なんです。キリスト自身が祭司となり、キリスト自
身が羔こひつじとなり、そして、贖罪の場所はどこかと思ったら、この十字架という至聖所だ。旧
約の幕屋の姿を、それを全部キリスト自身がやってしまった。キリストが「活ける幕屋」
なんです。

●聖霊の幕屋

そして今度は、キリストにいわせると、神さまが神という幕屋なんです。ということとは、



キリストは神の中に隠れてしまったでしょ。神という幕屋の中に入ってしまったでしょ。だから、三段構えだよ。神という幕屋。「神の幕屋」はキリストである。そして今度は、キリストの御霊を宿しているところの幕屋が「聖霊の幕屋」なんです。我々はこの聖霊の幕屋です。ここ（天幕、Gを頂点としabcを底面とする三角垂体）に神（G）・キリスト（X）という大黒柱（GX）が立っている。集会を構成している我々一人びとりはa、b、cだ。この天幕の中に何が満ちてくるかというと、「プニューマ・ハギオン」「聖霊」です。聖霊が満ちている。だから、我々の集会は「聖霊の幕屋」である。観念的なただ団体ではありません。聖書をまだ研究しているような研究会ではありません。

「神という幕屋」

「キリストという幕屋」

「聖霊という幕屋」

と言っても構わない。我々は聖霊の幕屋なんだ。

そして、パウロは何と言いましたか。

「この地上の幕屋が崩れたら、今度は永遠の幕屋の中に入る」

というようなことを彼は言っている。

「我らは知る、我らの幕屋なる地上の家壊るれば、

というのはこの身体のこと。

神の賜う建造物、すなわち天にある、手にて造らぬ、永遠の家あることを。」（コ

リント後5:1）

と。霊体がある。霊の身体がある。

さっきのヘブル書にもどります。

「¹²山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。¹³もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、

旧約ではそんなことをやっている。

¹⁴まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。¹⁵この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん為なり。」（ヘブル9・12～15）

「彼は新しき契約の中保なり」

と。そのとおり。非常に大事なところですよ。そういうわけですから、今日はもう大変な全福音が語られているわけです。



●無力の無限力

11 いとたかきものそは至上者なんじのためにその使者輩つかいたちにおおせて

汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり

12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんために汝をささえん

「そは御使たちに命じて彼は汝の全ての道にて汝を守らせ給えばなり。かれらの手の上に汝をもたげ、汝の足を石にぶち当つることなからしむ」

と。「ぶち当つる」なんて、私は訳したんですけれども。手の上に乗つけて守る。荒野の試みで、

「こんなことを御使はする。では、お前もひとつ崖から落ちてみる。御使が助けてくれるから」

なんて、サタンがキリストを誘ったでしょ。

「神を試みてはいかん」

とキリストが言った。

「御利益信仰ではないぞ。神さまが助け給う時は助け給うので、神さまは、何やつても助けてくれるかなんて試したら、とんでもないことになる。神さまの御意によつて行くんだ」

と。御意は力を持つてますよ。ただ御意は心だけではない。神さまの心のあるところには必ず力がある。もったいぶつて、ただ「御意」なんて言つたつて。

今年は羊年だから、私も年賀状に書いた。

まさきひと「牧人の力に生くる羊かな」

と。とにかく、年賀状が五百枚ばかり来てしまつて、どうにもならなかった。二百枚しか刷らなかつたから、あとどうにもならない。あとは葉書に書いた。時間がかかつてしょうがない。私は形式的なことは嫌いだから、何か一言書く。印刷だけの年賀状には私は返事を書きたくない。心がこもつてないから。それから、番地と名前と全部印刷してるのも私は好きではない。私は番地は仕方がないから印刷するよ。けれども、自分の名前は必ず自分で書きます。「祈る」と書いたら、必ずその瞬間に祈ります。神さまは偽らないから。無力の無限力ということ。

「キリストは力を持つていらつしゃいます」

ではダメですよ。

「キリストの力わがうちにあり」

ということにならなければ。そういうように、とにかく内側に持つてなくては。賜物というのはそのに現実^{じつじ}に今、即してあることなんです。思われている世界ではない。

「我思つゆえに我あり」

なんて、とんでもないよ、あのデカルトは。だから、みんな意識過剰になつてしまつて、



しまいには分裂症になったり、神経衰弱になったりする。

なぜ聖書は永遠の書かというところ、そういう生命を持ち、力を持つ。力は相手を救いあげる力ですよ。倒す力ではない。

「彼らの手の上に汝をもたげ、汝の足を石にてぶち当つることなからしむ」

と。いつかもお話した、ある例があつたでしょ。信州の人だよ。崖から落ちる瞬間に、

「キリスト！」

と称えたら、何も怪我をしなかったという。これは全くその通りなんです。

●弱者となると強者に

¹³ なんじは獅と蝮とをふみ^{まむし} 牡獅と蛇とを足の下にふみにじらん^{わかきし}

そんなやつよりも強いと。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

「南無キリスト」

という事態が本当ならば、守られる。怖いものはないと。恐れ的心を持ったら、敵に乗ぜられる。それもただ力むのではない。一番その怖いのは本当の愛がこもっているときです。アッシジのフランシスがそうだ。

「兄弟狼よ。お前にこれから食物をやるから、悪さをするな」

と言った。人を食つてしょうがない狼がフランシスになつてしまった。毎日、食物をやつた。狼がなついてしまつて、握手するように手を出したと書いてある。大変なひとだよ、フランシスという人は。フランシスの伝記や何かを読んでごらんさい。

私は時間があればいくらでも大学で講義してやりたいけれども、もうやめた。大学生が乗つかつてこないもの。百人聞いていたつて、本当にこの集会にやつて来ようなんていうのが、いるかいけないかというわけだ。この中にいる人は、これは例外者としてやつて来た。まあ、東大でもそう。もう、今の日本はどこに望みがあるんですか、青年が本当のものを把ま^{つか}なかつたら。その代わり、この福音を把んだあなた方は本当の強者になるんだよ。

「強者は一人あるときに最も強い」

という。これはシラーの「ウィルヘルム・テル」の中の言葉です。シラーというのも勢いがいいからね。ベートーヴェンの第九シンフォニーの「アン・デイ フロイデ」(歓喜に寄す)というのを私は『芸術の魂』(小池辰雄著作集第二巻 1976年刊)に訳したでしょ。あれを全部訳したのがないんだ、今まで。昔の人で訳した人があるかも知れませんが、けれども、私は知らん。

その「強者」というのは、本当の弱者となると強者になる。

「我弱きときに強し」



とパウロが言った。

「自分は強い」

なんて思ったら大間違い。

「無力者」

なんだ。無力者となったときに、無限力者になる。キリストに力がある。キリストも、

「自分は何もできない」

と仰ったではないですか。ところが、神さまで「シャッダイ」みたいに、全能者的に動いたじゃないですか。そういうキリストにぶつかって、

「降参しました！」

と言うと、その世界に入れるんです。もう今度は、そういうことをはつきり書いてやるよね、本当の聖書入門を。5号活字くらいで書かなければダメかな（笑）。

あなた方は本当にしつかりしてくださいよ、若いのは。小池先生にばっかり任してはダメですよ。先生なんていうのはもう75歳で、大して力はないんだ。あなたがたの方がよっぽど腕力がある。でも、腕力ではダメだよ。

どうぞ、そういうことで1979年は勢いよく進む。去年は馬の年か。今年は羊。羊は弱いけれども実は、詩篇23篇のごとく最強者と一緒だから。キリスト自身が

「神の羔」

というじゃないですか。羔の年なんだ、我々は。易者が言ってたよ、羊は知恵はなかなか働くけれども、力は弱いと。

●愛をもってしがみつく

「^{まむし}蝮を踏み、^{おろち}蛇をも踏みにじらん」

という。

「まむしに咬まれても毒が回らない」

と、パウロはそうだったじゃないですか。マルコ伝の一番後ろにそういうことが書いてあったね。

「¹⁵斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を^{のべつた}宣伝

えよ。¹⁶信じてバプテスマを

御霊のバプテスマを、

受くる者は救わるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。

十字架を通してバプテスマを受けたら、十字架を通してキリストの聖霊を受けたら、もう

「罪、罪、罪」

なんて、自分のことばかり考えるなと。

「罪は全部、キリストが背負ってしまったんだから、積極的に陽者となれ」



と言うんだ。本当の隠者となれ。キリストの中の本当の隠者となれば、本当の陽者となるんですよ。

17 信する者には此等の徴、ともなわん。即ち我が名によりて悪鬼を逐いだし、新しき言を語り、¹⁸ 蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。」（マルコ16・15〜18）

と。そのとおり。使徒行伝のペテロ、パウロはこれを本当にやりました。聖霊の人だから。無教会では、ひとつもこういうことは出てこない。観念信仰だから。

「そうじゃない」

と言って勇ましく進んで行ったのは手島君だよ。手島君の信仰の構造が何々と、私はここで言いたくない。けれども、善きものは善きものとしてはつきり認めます。私みたいなやつを通して、神さまは今までに不思議なことをいくらもなさった。これからもなさる。これからいよいよまたそうなりますよ、私は捨身でかかるから。

これが即ち、

13 なんじは獅^{しし}と蝮^{まむし}とをふみ^{わかきし}壯獅^{しし}と蛇とを足の下にふみにじらん

ということです。今度は最後は、神さまの言が響いてきた。14節から、

14 彼その愛をわれにそぞげるがゆえに我これを助けん

「彼われを愛したるがゆえに我これを助けん」

と。今度は逆に、「彼」は「汝」と読んでください。

「汝は私を愛したから、私はお前を助けるぞ」

と。この「愛する」という字は、

「特に愛をもつてしがみつく」

というような字です。「ハーシャック」という字で強い。ヘブライ語というのは似た発音がたくさんある。三つの子音からできあがっているからね。だから、覚えにくいよな。ラテン語も覚えにくいけれども、その点ではギリシア語は一番変化が多いから、かえって覚えやすい。少し乱暴な訳し方をすれば、

「彼は私にしがみついたから、だから、私はこれを助ける」

というわけです。

かれわが名をしるがゆえに我これを高^{たかきところ}処におかん

「かれわが名を知るがゆえに我これを高きに上げん」

「愛する」ということと、「名を知る」ということが同じことなんです。この「ハーシャック」という言葉で非常に著しいところがあるから、ちよつと開いてみようね。申命記7章7節です。6節から読みますと、

「⁶ 其は汝は汝の神エホバの聖民^{きよきたみ}なればなり。汝の神エホバは地^{おもて}の面の諸^{もろもろ}の民の中より汝を擇^{えら}びて己の宝の民となしたまえり。



イスラエルは神さまの選びの民、「宝の民」だと。けれども、血統的なイスラエルではないですよ。あなた方はみんな新しきエルサレムの人です。我々は神さまの選びの器であり、宝の民なんです。

7 エホバの汝らを愛し汝らを選びたまひしは汝らが万の民よりも数多かりし
によるにあらず、汝らは万の民の中にて最も小さき者なればなり。」（申命記7:
6〜7）

「汝らは万の民の中で最も小さき者だから逆に選んだんだよ」と。この、

「エホバの汝らを愛し」

というこの「愛し」という字が「ハーシャック」という字が使つてある。普通は、「ヘセッド」という字が非常に多いけれども、こここのところは「ハーシャック」という字が使つてある。

「汝らを抱くように愛した」

という気持です。

もう一箇所見てください。同じ申命記の10章15節、

「¹⁵然るにエホバただ汝の先祖等を悦びて之を愛し、その後の子孫たる汝らを
万の民の中より選びたまへり。今日のごとし。」

この「愛し」がそうなんです。「愛する」ということと「選ぶ」ということが同じなんだ。そして、愛し選ぶと、今度は使命がかかってくるんです、責任が。

「人々を愛し、人々を救つていく使命と責任」

を負わせられる。愛されているからといっていい気になつたら、これはダメだよ。

16 然ば汝ら心に割礼を行え、重ねて項を強くする勿れ。」（申命記10・15〜16）

ここに書いてあるね。身体の割礼ではダメだ。「心に割礼を行え」と。イスラエルの民は項強き民、頑固な民で、パウロがあれだけひっくり返されたのに、まだ

「パウロは間違っている」

なんて言うかと。キリストをなぜ今でも十字架にかけると。項強き民だよな、イスラエルは。あいかわらず、新約を受けとらないんだから。

●キリストの活ける幕屋

人間は絶対に救いを要する。誰でもが救いを要する。宗教は最も必要なことなんです。それを

「宗教だけはいらない」

とやっているんだ、大方の日本人はみんな。教育家がいくら「教育、教育」なんて言つたつてダメですよ。私はもう教職50年で、さんざんやってきたから。25歳から75歳まで、ちようど半世紀だ。

かれわが名をしるがゆえに我これを高処におかん



と。この「名を知る」ということ。キリストの名を知ると、

「御名によりて歩め」

と言ったでしょ。あれは本当にペテロはキリストの名を知っていたんだ。御名が内住していた。キリストの力ある愛がペテロを通して働いた。生まれつきの跛者が立つてしまった。それを本当に高き上げてやるぞと。

15 かれ我をよばば我こたえん

我その苦難のときに偕におりて之をたすけ之をあがめん

「彼われを呼ばばわれ答え、われ彼と共に。悩みのときに、われ彼を助けん。われ彼に栄光を与えん。」

呼べば応えるという。キリストは、呼べば答える。呼ぶと同時にその中に入れるんですよ、本当の「呼ぶ」ということは。祈りはそのような「呼び」ですから。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

という。しかし、我欲的な祈りをしたってダメだよ。そしたら今度は、逆に聴かれるよ。逆な聴かれ方をする。霊界の霊的法則は自然法則よりもっと凄いものを持っているから。いいですか。人にどう思われようという。本当に、

「神—キリスト—我」

のこの関係をしっかりと立てていく。

16 われ長寿をもてかれを足わしめ且わが救いをしめさん

「長寿をもつて」というのは直訳すると、「長き日をもつて」ということです。旧約的にいえば、「長寿」だけでも、新約的にいえば「永遠の生命」だよな。地上の何十年ではない。

「永遠の生命をもつて彼を満ちたらわせ、わが救いを彼に示さん」

と。救いの内容は永遠の生命です。死んでも死なない生命です。

まあ、大変な詩篇です、この91篇というのは。キリストの光で読めば、えらいことになってしまふ。ユダヤ人が詩篇を読むよりも、我々が詩篇を読む方がはるかに詩篇の奥を読んでしまふ。だから、やめられないんです。そうでなかったら、なんだか旧約的制限があるから、嫌になってしまふ。我々が創世記から黙示録までこれを「聖書」というのは、キリストの光で読むからです。

「聖書は我を証しするものなり」

としての書として読んでいるから。エホバの神さまの奥にキリストがごさるんだ。

これがこの神という幕屋、キリストという幕屋、聖霊の幕屋です。我々自身がそのような——我々の群がこの「御霊の幕屋」ですが——我々一人びとりがそのようなキリストの活ける幕屋となる。幕屋の中にはキリストの霊がある。我という幕屋の中に。おわります。

